

銀座水族館 (七つの海の魚および水産切手)

—(19)—

東京支店 神原 勇

スズキ目ツノダシ科

ツノダシ *Zanclus cornutus*

トゲツノダシ *Zanclus canescens*

英名 moorish idol

和名 ツノダシ (一般)

アミガサウオ (和歌山県 田辺)

タカマツ (高知県 手結)

イトマキ (和歌山県 太地)

シマウマ (高知県 相馬)

ツノダシは太平洋・印度洋の熱帯海域に多いが日本では南海に多くサンゴ礁の魚としては比較的北方にまで分布し千葉・神奈川の磯でも見られることがある。

ツノダシはスズキ目ニザダイ科の近縁であるがスズキ目の中では遠い類縁関係にあるチョウチョウオ科とは頭蓋骨やヒレの構造などが良く似かよっている。これはサンゴ礁の同一環境に生活するための二次的類似によるもので平行進化によるものではないとされている。

ツノダシの眼の前方には突き出た一對のツノ(角)があるのでツノダシ(角出し)の名の由来するところである。このツノは狭い水槽で飼育すると次第に伸びて30cm位の長さになることもあるが、自然環境ではこのように伸びることはないので、多分他の魚のいたずら、もしくは闘争により食いちぎられるものと思われるが真偽の程は不明である。

ツノダシに良く似かよった熱帯性海水魚にチョウチョウオ科のハタタテダイがある。ツノダシは背ビレの軟条の最前部が青白色で糸状に後方に伸びて流れになびいているのに比べて、ハタタテダイは固くピンとはった状態で流れになびくこ

とはない。またツノダシは黄色の地にはやや巾の広い黒色の4本の横帯があって、その黒い横帯は尾ビレにもかかっているが、ハタタテダイの尾ビレにはこれが見られないので容易に識別される。

ツノダシの体形はいちじるしく側扁し、体長は約20cm程度、体長より体高の方が大きい場合もあり全体としては円盤を思わせる程丸い。

口先(吻)は突き出たおちょぼ口で、この点からもハタタテダイと区別される。剛毛状の細い歯が一行に並んで口の先につきでているが、これはサンゴ礁に生育する海藻類を食べるのに都合良く出来たしくみであるが、やわらかい小魚を食べることもある。

ツノダシは沿岸のやや深みのサンゴ礁の岩礁地帯の海底近くに1~2尾からときとして10尾位の群をなして泳いでいるが、決して大きな群を形成することはない。背ビレの軟条を糸のように流れになびかせて遊泳するさまは非常に美しく、ハタタテダイと共に水族館での人気ものである。沖縄では追いこみ網で漁獲し、観賞魚としてよりも食用魚としての価値が大きくカマボコの好材料とされている。サンゴ礁の魚の幼魚は夏季黒潮にのり北上して流れ藻などと共に日本南海岸に現われるが、このツノダシの幼魚は体長3~4cmの体色銀灰色で成魚の美しいおもかげは見られない。これ以下の稚魚は未だ発見されず幻の稚魚である。

ツノダシ科は1科1属2種で前述のツノダシの他にトゲツノダシがあるが、トゲツノダシはツノダシにあるツノがなく、口角上方に棘があるがツノダシにない。このトゲツノダシは日本ではほとんど見られない。

スズキ目 ツノダシ科

ツノダシ : *Zanclus cornutus* : moorish idol

トゲツノダシ : *Zanclus canescens* : moorish idol

近縁のチョウチョウオ科、ニザダイ科と共にサンゴ礁を代表する魚。一ツノ、黄色の地=比較的幅広い黒色の横帯があり、ツノは青白色で後方に糸状に伸びる。普通は見られるがツノダシ、トゲツノダシはあまり見られない。体長は20cm程でサンゴ礁の魚を観賞魚として利用魚として扱い、カマボコは好材料とされる。



沖縄 -1961



フィリピン -1972



沖縄 -1959



マルディブ諸島 -1963



マルディブ諸島 -1963



モザンビーク -1951



クリスマス島(印度洋) -1968



ワリス・フツナ諸島 -1962